

和硯の銘品

「雨畑硯」の歴史

青黒き雨畑真石。
あめはたしんせき

山河の恵みというべきその原石を、職人たちは魂を込めて彫り続けた。
受け継がれること実に七百余年。

中国の端溪硯にも肩を並べるといわれるほどの和硯の銘品

「雨畑硯」の歴史をひもとく。





雨畑川上流にある坑道の入口付近



雨畑硯の里 硯匠庵

天野 元さん

坑道から採掘した原石(左) 硯の裏面に彫られた日蓮大上人像と雨畑硯についての記載がある『甲斐叢記 卷之四』(右) [硯匠庵蔵]

日蓮大上人の弟子・日朗上人が
雨畑川で見つけた青黒き石。
それが雨畑硯の
始まりだという伝説。

その発祥は、700年以上前とも伝えられている「雨畑硯」。早川町を流れる雨畑川の渓谷で採掘された原石は優れた職人たちの手により硯となり、多くの文人墨客に愛用されてきました。そんな雨畑硯の歴史と、地域の文化を伝承していく誇りについて、「雨畑硯の里 硯匠庵」の天野元さんに伺いました。

「永仁5(1297)年に日蓮大上人の弟子の日朗上人が七面山開山の帰り道に、雨畑川上流の河原で青黒い石を見つけたのが雨畑硯の始まりだと昔から言い伝えられています。今、この硯匠庵付近はダム湖になっていますが、昔はこの辺りも川でした。その谷治いの奥深くまで雨畑川が続き、その支流に稲又川という川があり、そこにある坑道から今でも原石を採掘しています。どうして硯を作ることになったのかは定かではありませんが、おそらく日朗上人が硯に対する知識や何らかの技術を雨畑の人々に伝えたのではないかとわれています。雨畑には武田信玄公の時代から金山があり、掘削技術が備わっていたこともあり、硯産業の発展につながったのではないのでしょうか」



大正時代の作業場の様子(写真提供: 硯匠庵)



雨畑地区で唯一の硯職人・望月玉泉さん。硯匠庵内の工房で製作を続けている(左)

掘り出した原石のうち、硯にならなかった部分を有効活用しようと製品化した「雨畑ブラックシリカ」。石の持つ特性を生かし、マッサージ用かっさプレートとして美容分野での需要も高まっている(右)

雨畑硯は

全国的なブランドに成長。

希少性と信頼性を伝えるために

原石は「雨畑真石」と名付けられた。

「天明4(1784)年、一橋公に硯を献上したことがきっかけとなり、雨畑硯の名は世に広まり、盛んに生産されるようになりました。古文書によると、原石の採掘を装い、金を掘る者が現れたことで一時期幕府から原石を掘ることを禁じられた時代もあったようですが、雨畑の職人たちはそんな時代も乗り越えていきました。歳月を経て、第14代将軍徳川家茂公に硯を献上したことで再び採掘が許されると、雨畑硯の名はさらに広まり、その需要はますます高まっていきました。明治時代には最盛期を迎え、当時はこの地域に硯職人が100人以上いたそうです。一方、非常に人気が出たことで、偽物も出回るようになったため、『雨畑硯製造販売組合』を設立し、品質の保持と偽物の流通防止に努めました。大正時代には雨畑で採掘され、雨畑で作られた硯であることを証明するために、硯の裏面に原石名『雨畑真石』の文字と、職人の名前を掘り入れることとしました。

時代の流れとともに、高齢化や硯の需要の減少などから、雨畑地区の硯職人は減っていき、今では望月玉泉さんのみとなりました。しかし、どんなに時代が変わっても、硯がなくなることはない。私は思っています。墨と筆で文字を書くとい



雨畑硯の里 硯匠庵

雨畑硯をはじめとする銘硯や古文書などを展示している。また、硯職人・望月玉泉さんの作業風景を見学できるほか、硯彫り体験、小物・ストラップ作りなどのプログラムも充実。硯や和紙などの販売も行っている。

※各種製作体験は要予約

住 所／早川町雨畑709-1

T E L／0556-45-2210

開館時間／9:00～17:00

休 館 日／火曜日(祝祭日の場合はその翌日)、年末・年始

入 館 料／一般200円、中・高・大学生100円



う連綿と続いてきた文化は、日本人にとってなくてはならないものだと思うからです」

雨畑の人々が守り伝える 雨畑硯の文化。

「硯は早川町の大切な産業であり、文化です。これを後世に残していきたいといった思いから、平成12(2000)年に硯匠庵が誕生しました。現在は地域の人々で硯匠庵管理協会をつくり、町からの委託を受けて管理しています。硯匠庵では、雨畑地区のものである坑道の管理も行っています。原石はどこからでも採れるわけではなく、坑道の中でも硯に適しているのは、わずか40〜50センチの幅の部分だけです。このように大変貴重な雨畑真石は、鋒^{ほう}鋭と呼ばれる表面の粒子が非常に細かく均一であるため、すり心地が良いという大きな特長があります。書にたけた方に話を聞いてみますと、やはり日本の墨に一番合うのは雨畑硯だろうと言われます。私たちにとっては、昔から受け継がれてきた硯は産業であることに違いはありませんが、それよりもむしろ日本人として、この雨畑硯という文化を何としても残していかなければという思いを強く持っています」